

# 死刑について考えてみませんか

## なぜ死刑制度に賛成／反対するのか

### フォーラム90との共同制作リーフレットの抜粋です

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）  
東京都荒川区南千住1-59-6-302

#### ■なぜ死刑制度に賛成するのか？

なぜ、死刑制度に反対するのか？という質問に答える前に、なぜ、死刑制度に賛成するのか？と尋ねてみましょう。

主に語られるのは次の点です。

◎死刑がなかったら、凶悪な犯罪が増えるのではないか。死刑があるから社会の秩序は保たれているのではないか。

→「犯罪の抑止力」といわれる論点です。しかし、死刑があるからといって犯罪が減少するわけでも、死刑がないからといって犯罪が増えるわけでもありません。さまざまな研究がなされてきましたが、死刑と犯罪の発生との関係は結局ありませんでした。

◎被害者の気持ちを思えば、犯人を極刑にしなければならないのはあたり前だ。

→「報復感情」といわれる論点です。しかし、それは犯人を死刑にすることで解決できる問題なのでしょうか。死刑制度に反対の意見を表明すると、必ず反論されることがあります。「あなたの愛する家族が殺されても、それでも犯人に対して死刑を求めないのか」と。正直に言って、実際にそんな体験をするまで誰にも答えられないし、無理に答えても説得力はないでしょう。だから、口ごもるしかありません。ただ、日本においても、犯人の処刑を望んでいるわけではない被害者遺族もいる、という事実は知っていただきたいと思います。また、犯罪被害者や遺族への具体的なケアを充実させることはもちろん必要です。しかし、それは犯人を死刑にすることで解消される問題ではありません。

#### ■なぜ死刑制度に反対するのか？

それでは、なぜ死刑制度に反対するのか、をお話しましょう。

生命はすべての人権の前提であり根幹です。死刑は殺人に他ならない、ということは言うまでもありません。それも国家という圧倒的な力を背景とした無抵抗な囚人への殺人です。

「死刑判決は出したくない。でも法律があるからしょうがないんだ」…これが裁判官の偽らざる気持ちだそうです。

「やりたくない。でも仕事だからしょうがないんだ」…これが執行を直接担う刑務官の偽らざる気持ちだそうです。

「みんなが不幸になることならやめようよ」…これが私たちの率直な思いです。

#### ◎冤罪の問題

→「冤罪」が仮にあったとしても、それは例外的な問題だろうと思われるかもしれませんが。しかし、冤罪は「例外」ではないのです。たしかに日本の検察が起訴すると99%以上の割合で有罪判決が出されている現状があります。そんななかで、逮捕されたり、起訴されたりすれば、もう有罪間違いなしの論調でマスコミは報道します。大きい事件になるほど警察、検察は犯人を「作り」ます。「自白」しない限り釈放を認めないシステムの中で、冤罪事件は制度的に生まれています。そして、一度「自白」してしまえば、裁判の中でどんなにその「自白」が強要されたものだと否定しようと、判決がそれを認めることはほとんどないのが実情です。冤罪が晴れたとき、他の刑罰であればまだ救いがあるかもしれませんが死刑に処してしまった人には償いようもありません。アメリカで死刑制度を見直している州がありますが、その大きな理由は、DNA鑑定などで明らかに無実であることがわかった死刑囚があまりに数多いからでした。日本でも最高裁で死刑が確定した後、再審請求で無実が明らかになった人が戦後4人います。

### ◎重罰を求めてどうなるのか

→アメリカは重罰化によって犯罪を抑止しようとしてきました。死刑や終身刑を乱発してきましたが、結果は「犯罪大国」「刑務所大国」「死刑大国」という汚名を世界に轟かせているばかりです。「テロ」に対して、やみくもに「報復」してきた結果、無辜の市民をいっぱい犠牲にした上に、「報復」の連鎖を生んでいるではありませんか。報復感情に依拠した刑事政策はそのような結果をもたらしています。私たちはそんな社会を見習うべきなのではないでしょうか。

### ◎死刑囚と向き合うこと

→死刑判決が確定するまでは、拘置所で死刑を求刑・宣告された方と面会や文通をすることができます。そうやって私たちは、多くの死刑囚と交流してきました。死刑囚と交流したほとんどの方が「もちろん死刑囚にもさまざまな人がいますが」その人が鬼でも悪魔でもなく、身の周りにはいる「ただの人」であることを知りショックを受けます。そうして、なぜ、この人が処刑されなければならないのかを考えます。「この人は冤罪ではないのだろうか？」とか、あるいは、「こんなに罪を悔いている人をなぜ改めて処刑しなければいけないのだろうか？」と。しかし、その交流も、最高裁で死刑が確定するや断ち切られます。日本の死刑囚処遇は死刑囚を隔離する姿勢で貫かれています。それは私たちが、死刑という制度をもった社会に生きながら、その意味を具体的に考えることから遮断しているのではないのでしょうか。

だから私たちは呼びかけます。

死刑について考えてみませんか？